震災で分かった文化性

堀井　日本は今、行き過ぎた中央集権や効率優先主義によって、歴史・文化の軽視や地方の疲弊といった問題が顕在化しています。上田先生は2009年に『西郷隆盛 ラストサムライ（日本経済新聞出版社）』を上梓され、現在は『西郷義塾』を主宰されるなど、西郷隆盛の思想をもって現代日本の国づくりを根本から問い直そうとされているように思います。本日はそうした観点から、現代日本が抱える文化性の欠如や地域社会の自立といった問題について、上田先生のお考えをたっぷり伺いたいと思います。

上田　私もお話したいことがたくさんあります（笑）。まず、文化性の欠如については、阪神淡路大震災が起きたときから感じておりまして、この度の東日本大震災でその思いをさらに強くしています。ここでいう文化性とは多様性のことです。東日本大震災では、地震によって電力供給が断たれ、鉄道輸送が完全にストップしました。すべて電化されているからです。とはいえディーゼル機関車を使うことができれば、鉄道輸送は少しでも確保できたはずです。アメリカではテロや災害で架線の電力供給が断たれたときに備えて、全列車の2割程度はいまだにディーゼル機関車にしています。また、陸路が崩壊したのであれば、海から救援隊や自動車などを投入すればいいのですが、海上自衛隊の揚陸艇は災害地にはなかなか行けませんでした。揚陸艇というのは、敵の攻撃をかいくぐって侵攻し、敵陣の岸辺に直接乗り上げて兵士や装甲戦闘車などを上陸させる、いわば海の戦車です。日本の揚陸艇はフェリー（貨客船）のように波が静かで港がないと接舷できないものだったので、地震で壊滅状態にある港には入れませんでした。

（編集部補：東日本大震災では、「オペレーション・トモダチ（米軍による東日本大震災のための救援・救助作戦）」で、震災の翌月、宮城県気仙沼市の離島・大島に米軍の強襲揚陸艦エセックスの汎用揚陸艇が上陸し、海兵隊員ら約300数十人が搬入した重機などを使ってがれき撤去を行った）

また、日本のコンテナ船には荷揚げ用のクレーンを装備していません。クレーンは港側にあるんです。一方、アメリカにはクレーンのない港でも物資を運べるように、クレーンを装備したコンテナ船があります。こうした備えは経済的、効率的に考えれば無駄といえますが、有事になると活きてくる。一見不経済で非効率であっても、こうした多様性を備えておくことが文化だと思います。電力も原発だけに頼るのではなく、いろいろな手だてを備えておくべきです。

堀井　いつ頃からこうした効率性・経済性が偏重されるようになったのでしょうか。

上田　震災対策に限らず、近年の日本の政治、経済、社会全般における混迷的状況は、明治維新にさかのぼって問題があると考えています。大久保利通をはじめ明治維新を進める者たちは、「西洋の技術を取り入れ、日本人の魂をもって近代革命を起そう」という和魂洋才思想に基づいて改革を進めました。その結果、日本の産業や経済はかなり西洋化しました。ちょんまげを結ったり刀を差す人がいなくなり、生活習慣もかなり洋風化しましたね。しかしここで問題となるのが、洋才を重視するあまり「和魂」を切り捨ててしまったことです。

魂を取り戻す

上田　西洋化によって日本人が自らの魂をなくしていることは、私の専門である建築や都市にも如実に表れています。例えば、日本人がヨーロッパ旅行をすると、必ずといっていいほど古い教会や町並みを観光します。歴史遺産が豊富にあるからですね。一方、日本では、ヨーロッパのような古い町並みは京都や奈良を除いてほとんどなくなってしまいました。そういうことを言うと、「日本と西洋では都市構造が違う。西洋は石造建築だから残っているが、日本は木造建築だから戦争で焼けて残っていないのは当然だ」と反論されそうですが、ヨーロッパでも第二次世界大戦で多くの歴史的建築が失われました。しかし、それらの多くが戦後に復元されているんです。その典型的な例が、ドイツ・ザクセン州の州都ドレスデンにあります。第二次世界大戦でイギリス軍は、この町の中心にあるバロック建築のカテドラル（聖母教会）を空爆し、16～18世紀の町並もろとも一瞬にして吹き飛ばしました。カテドラルは内部が吹き抜けですから、ここに高性能爆弾を打ち込んで屋根に穴を開け、さらに焼夷弾を投入して大爆発させるという新手の作戦です。もちろん多くの市民も命を落としました。ドレスデンに住むザクセン人は、イギリス人（アングロサクソン人）から見れば民族的には同胞です。ドイツ軍は、そんなまちをイギリス軍が攻撃するとはよもや考えておらず、チャーチルが下した容赦ない奇襲に驚愕しました。

さて問題は、この爆撃を受けた後の対応でした。ドレスデンの人たちは爆撃された場所をフェンスで囲み、そこに粉々に飛び散った建物の破片を放り込み、瓦礫のまま60年間放置しておいたんです。いつか必ずカテドラルや町並みを復元しようという考えからですが、その歴史的な破片を誰も盗んだり持ち出そうとしなかったことには感心させられます。そうして60年が経ち、10万個以上の破片をコンピュータで計測して再び組み立て、カテドラルや町並みを復元したんです。復元された建物は見ればすぐ分かります。当時の破片は黒ずんだ色をしており、それが見つからなかったところは現代の白い石で埋め合わせていますから、黒と白のまだら模様になっているんです。日本人はこの建物をぜひ見るべきだと思いますね。なぜなら復元された聖母教会は、ドイツ人の魂の象徴だからです。これを見れば、「日本は木造建築だから焼けてなくなれば復元できない」なんて、復元する気がないための言い訳のように聞こえます。

堀井　いったい「和魂」はどこに行ってしまったのでしょうか。

上田　建築や都市についていえば、日本人の魂の象徴は「木のまち」だと思います。私たちの長い歴史を振り返れば、連綿と続く木へのこだわりが感じられます。例えば日本は中国から漢字をはじめさまざまな文化を受け入れましたが、石造やレンガ造の建築文化は受け入れていません。空海は入唐の折に大雁塔や小雁塔（教典や仏像などを保管するための石造の塔）を見たに違いありませんが、日本で寺を建てるときはそれに倣わず、木造で建てています。明治維新まで日本には死者の柩以外は石造やレンガ造の建築はありませんし、城や天守閣もすべて木を漆喰で固めたものです。天智天皇以前は天皇が代替わりするたびに建物や持ち物などを焼却し、最初から作り直す文化がありました。江戸のまちが大火で焼失しても、またすぐに建て直している。そうして外観は多少変わりつつも、木造の文化は連綿と続いているんです。日本人がここまで木造にこだわるのは、単に耐震性や機能性のためではなく、そこに日本人の魂が込められているからだと思います。これには安藤忠雄さんも共感してくれて、彼と一緒に木の文化について研究したこともあります。彼はセビリア万博の日本館を木造で設計して話題になりましたね。また、こうした木の文化は、かつて大阪商人の信用経済の象徴であった「のれん、蔵、船」にも反映されていますし、そうした商業文化を支えていたのが町家でした。つまり大阪人にとっては、町家こそが自分たちの魂の拠り所だったんです。しかし明治維新以降、大久保利通らが西洋文化の導入に躍起になるあまり、日本人古来の魂はどんどん追いやられてしまいました。

西郷隆盛とスイス

上田　大久保利通はプロイセン（ドイツ）やフランスで学んだ富国強兵策を掲げ、新たな国づくりをめざしました。もともと富国強兵という言葉は、熊本出身の勤皇の志士である横井小南（1809～1869）が言い出したもので、横井は富国強兵に加えて「士魂」つまり武士の魂の大切さを説いています。しかし大久保利通や山縣有朋らが目指したのは、士魂なき富国強兵でした。陸軍大将だった山縣有朋は、「武器さえあれば農民でも兵士になれるのだから士魂など必要ない」と考え、徴兵を行っています。江戸城の無血開城に端を発した上野戦争（1868年：旧幕府軍の彰義隊と薩摩・長州藩を中心とする新政府軍の交戦）では、大村益次郎が作戦指揮する新政府軍が、肥前佐賀藩から調達した多数のアームストロング砲を使って上野山の彰義隊をわずか1日半で陥落させました。まさに武器の勝利です。このとき西郷隆盛は、「仕えた殿こそ違え、彰義隊とて我らと同じ武士。それを殺すとはまかりならぬ」と主張したために総大将を解任されたと言われています。西郷にとって“武士より武器”という魂なき効率優先主義は、断じて受け入れ難いものだったのでしょう。

堀井　すべては岩倉具視使節団で欧米スタイルを学んだ大久保利通や木戸孝允らが効率最優先の富国強兵路線に走り、強力な中央集権国家をつくろうと